夢幻の航行

夢の断章





まだそれを知らなかった。しかし、その瞬間――不可能な十字路の真ん中に立っていた私は――すでに狩りは始まっていた。

1. 母なる獣





「そこは、記憶のない階層と雲の間――現実が、
地面そのものの前で崩れゆくのを、私は悟った。」

2. 摩天楼





「堕ちる前に啓示があった――私はもう腕も手もなく、夜だけが私の成るべき姿を決めていた。」

3. 高みの上で





世界が静まり返り、私たちの足が語る
ことができるようになった。

4. 僕の足を読んで





「世界が続かないところで、バスは止まった。」

5. パラグアイ通り742番





獣は、私が何であったかと、やがてそうでなくなる自分との境界を示すために現れた。

6. 黒豹





「痛みや恐怖が小さく感じられる瞬間がある。ただ、終わりというものが、まるで存在しなくなったかのように。」

7. 再来する者たち





群衆と奈落の間に、一つの言葉が届けられた――それ以来、静寂は訪れない。

8. エピファニア





彼らは、まるで星が行き来するように見えた。突然近くなり、また遠くへ、信じられない速さで、音も立てず――まったくの静寂の中、わずかに熱の波紋だけが漂っていた。

9. イピシュナのUFO





わくわくしてぼんやりしていたので、浅くて少しぬかるんだ水に足が沈んでいるのに気づかなかった。

10. 流砂





「そこでは、流れは穏やかで危険そうには見えなかったが、岸にはジャガーが一匹、向こう岸へ横切るカイマン、そして川の上にせり出した木の枝に身を伸ばすもう一匹のジャガーが目に入った。」

11. ボトたちの住処





それで中に入った。とても不思議な場所だったけれど、怖くはなかった。むしろ、どんな場所なのか強い好奇心で胸がいっぱいだった。

12. 死者の館

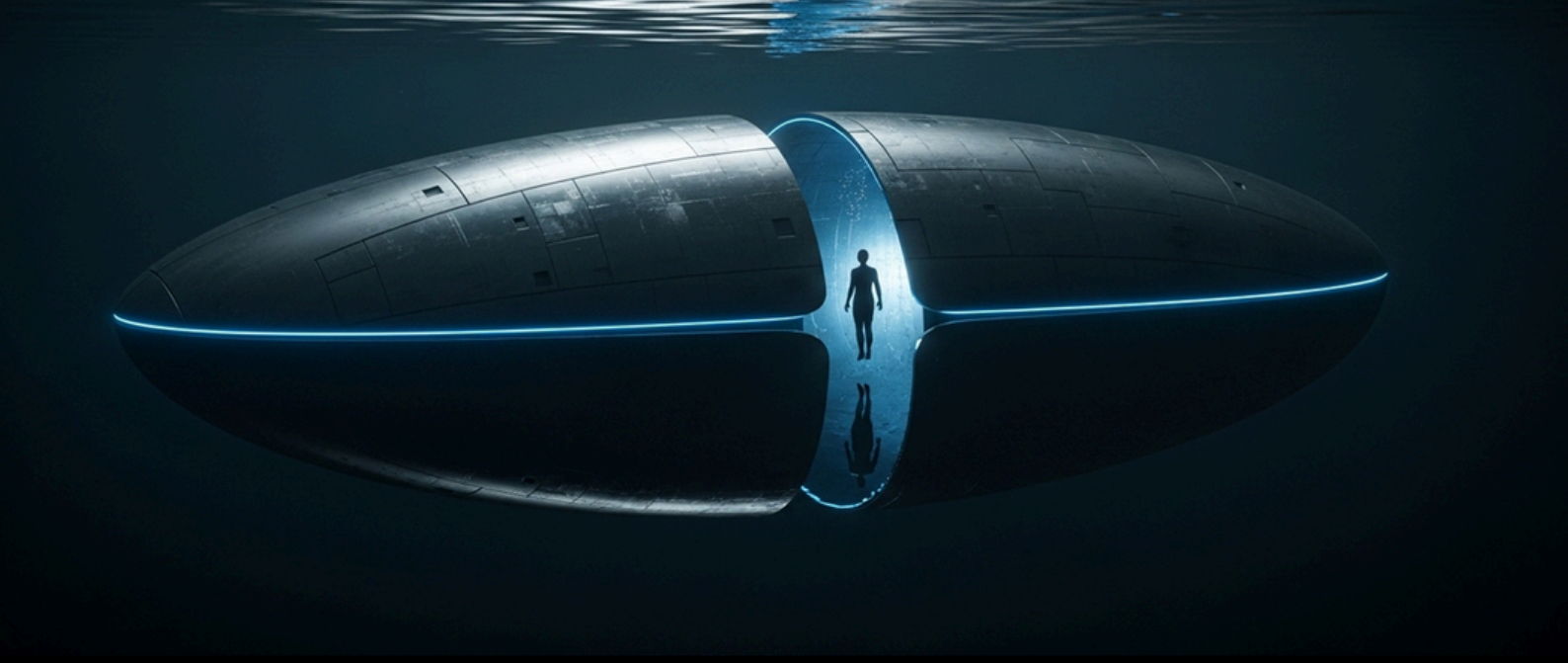




「胸騒ぎの予感がどんどん大きくなっていった——想像さえできない何かへの恐怖だ。すると、母が私を呼んで膝に座らせ、医者が小さな箱とその中身をテーブルに持ってきた。」

13. アトランティスへの道





「背後の扉は音も立てずに閉じられ、言葉ではなく、
身体で理解した——乗り物が降下しているのだと。」

14. 水の出会い





最初の者は胸に温かさが込み上げ、まるで子どものような軽やかな高揚を覚えた。目はまっすぐ紙幣へ、硬貨の輝きへ、そしてすべてがきちんと整えられた様子へ向けられた。

15. 供え物





目を覚ますと、どうやら夜明け前の時間らしかった。風はなく、空には雲ひとつなかったが、ひどく寒さを感じた。幸いなことに、光が目に入った――まるで火のように見えた。

16. その後の、その先





横をちらりと見やると、店の壁に、六匹の巨大な紙の蝶がいた。風にひらひらと舞っていたのは、まさにそれらだった。色とりどりの蝶は並べて留められ、まるで子どもたちの描いた絵のようだった。

17. 幸運の翼





そのとき、ブイが現れた。ゆっくり流れてきたわけではなく、まるで以前からそこにあって、誰かに気づかれるのを待っていたかのようだった。

18. 水母の少年





船体は淡い青色で、ところどころ透けていて、中には細い線や小さな電球、そして分解された時計のようなものが入っていた。

19. タイムマシン





「顔は薄い面の陰に隠れていたが、それでも小さな口は、ほとんど線のように見え、まばたきしない目だけがのぞいていた。」

20. 天使たちの家





何も壊れてはいなかった。ただ、見捨てられているだけだった。人々が逃げたわけではなく、恐怖に駆られて走り去ったのでもなく、ただ何かに次第に心を奪われていったかのようだった。

21. 空の火





私の上――いや、下かもしれない――はっきり決められないまま、人々が何事もないかのように逆さまのタイルの上を歩き、どこからともなく現れたかのような手すりに手をかけて体を支えていた。

22. 下へ昇り、上へ落ちる





まるで勝ったかのような気がした。試合のことも、点数のことも覚えていない。ただ、何かが終わったという感覚だけがあった――一日が終わり、もう何も求められないかのような。

23. それは僕じゃなかった





「それは飛行機じゃなかった。飛行機のふりをしている船だった。あるいは、自分の役目をほんのかすかにしか理解していない潜水艦だったのかもしれない。」

24. 火星の海

